

## 宗教の観点から見た異文化理解

田中朝香

今回、尼崎市と姉妹都市であるアウクスブルクを訪れるにあたり、私は研究テーマとして宗教の違いについて考えたいと思いました。理由はいくつかあり、一つ目は私自身が宗教に興味があったからです。世界的に広く信仰されているキリスト教について興味を持っていたものの、今まであまり触れる機会はありませんでした。

二つ目に、私たちが慣れ親しんだ仏教や慣習の違いについても深く興味を持ったからです。少し前、身内に不幸がおき、その際儀式を経験し、自分の宗派について考えさせられたからです。我が家は浄土真宗なのですが、お葬式や満中陰の際にはお経をあげていただいたり、しきたりに従う事が多くなったりと、普段の生活に比べて宗教を濃く感じました。それはしきたりに対する義務感や生死をより一層近いものとさせ、私たちの日々の生活でなおざりになっていたもの呼び戻したような気がします。そんな中、宗教についてどのように接しているのか知りたいと思いました。

最後に少しでも相手の事を知り、より深い友好関係を結べたらいい、という思いです。宗教、慣習、言語、教育などをまとめた意味での文化は、日本と全く異なります。そんな中、宗教に視点をあてて考えることで少しでも理解を深め、両都市が理解しあえる関係を築きたいと思ったからです。

事前学習として私はまず、私たちの宗教について理解を深めようと考え、尼崎市内の

寺町を訪れました。11か寺ある寺町ですがやはり一番多いのが浄土宗で四寺、法華宗、曹洞宗、臨済宗、律宗、日蓮宗、時宗がそれぞれ一寺ずつです。律宗以外が鎌倉時代に成立したもので、古い歴史を持っています。その後織田信長による本願寺焼き討ちや、一向一揆がおこるなど世間にたいしての宗教の影響の強さが伺えます。尼崎の寺町の成立は1617年とちょうど江戸時代に入ったばかりのころで、城下町形成の一環だったと言え、無視できない時代背景です。

私が寺町を訪れたのはちょうどお盆時でしたが、暑さのせいもあり、人の姿はまばらでお寺に参拝したりする様子はほとんど見られませんでした。意外に多かったのが墓参り来た人たちで、何組もの人たちがお供え物の果物や花をもって訪れていました。つまり私たちは寺や神社を訪れるよりも墓参りや盆行事など、先祖への行事を通じて宗教を強く感じていると思います。先祖を敬う、というのは元々中国の儒教的な考え方です。「世界は宗教でうごいている」(橋爪大三郎著)のなかであるように中国では血縁関係を重視し、祖先を崇拜する儀式を行います。日本人は2、3代前ほどと、中国に比べればそこまで重視されていないかもしれませんが、やはり祖先に対する尊敬の意は小さな子供でも持っていると思います。

尼崎の魅力として重視されているこの寺町には11か所のお寺だけでなく、七福神を祀った神社や寺があります。財宝繁栄の福

宝の神とされる大黒天を祀った本興寺は法華宗で、寺町 11 寺の中にも含まれているお寺です。

その中でも大覚寺では本堂の横に木造の能用の舞台を発見しました。世阿弥作の能「葦刈」は貧しい芦売りに身を落とした男が都に去った元の妻と再開する物語で、舞台となった大物あたりは絵にも描かれています。このように宗教と文化が混じって見られることもありました。

アウクスブルクを訪れて宗教が生活や土地に根付いていると感じられました。日本は政教分離をとっていますが、政教一致をとる国も少なくありません。政治的背景は訪れる建物やその歴史にそれは刻み込まれていると感じました。

まず初めに訪れた世界最古の社会住宅フッゲライですが、入居するにはキリスト教徒でなければならぬ事を聞き、驚きました。フッゲライは豪商ヤコブ・フッガーが資金を提供して設立されて以来、人々の寄進によって運営されており、現在でも入居者は条件を満たす者なら変わらぬ賃料で入居することができます。また、敷地内には美しい教会があり、そこでお祈りをささげることができます。このアウクスブルグはちょうどこのフッゲライが建てられた時期にマルティン・ルターによる宗教改革を経てカトリックとプロテスタントの共存が有名です。そのためカトリック信者のみの入居、という住居条件には首をかじげましたが、この条件はプロテスタントではなく、ユダヤ教の迫害を目的としていたそうです。特にユダヤ教は水浴を行うことなどの違いもあって迫害は強まったそうです。

次に、市庁舎に訪れた時に、その装飾を見て、強く感じました。この市庁舎ですが現在普通の職務は行われていないようで、第二次世界大戦の際に破壊されたものを寄付を募り、再建されたものだそうです。その中でもひととき美しい‘黄金の間’は天井が高く、真四角な部屋で、本当に黄金に輝くものでした。天井に描かれた女性はそれぞれ意味を持つ女神たちで、他にも栄華を極めたドイツ皇帝、つまりローマ皇帝が描かれています。これらの絵は宗教を強く反映していると思います。日本でもお寺の天井には曼荼羅が描かれていたりしますが、公共的建物にそのような装飾がなされることはありません。勿論日本は政教分離をとっているのが当たり前ののですが、政教分離をとるのか、政教一致をとるのかの違いを顕著に表していると思われました。



アウクスブルク大聖堂は私にとって初めての教会でした。そして、これ以上ないほどの豪華な姿は言い尽くすことのできないほどの感動をもたらしました。他の建物を訪れても、やはり日本よりも建築物一つ一つの規模がまるで違い、とても巨大です。教会に関してはその巨大さには国土の広さ

という理由の他に、たくさんの様式を重ねて作られていることがあるそうです。元々の建物を、その時代に流行りの様式を付け加えて修復を重ねているため、たくさんの様式を一つの建物でみる事ができるそうです。またこの大聖堂の地下にはアラバスタ様式という様式が取られており、ガラスではなく石を限りなく薄くすることで光を通す窓が見られました。このように教会を訪れることで様々な歴史的要素もみる事が出来ます。芸術的要素から見れば、教会にはたくさんの絵が飾られています。壁の上部には旧約聖書に登場する五人の預言者とイスラエルの王として名高きダビデ王が描かれています。

このアウクスブルク大聖堂を見学するにあたって驚いたことが、写真を撮ることは禁止されていないという事です。ミサやお祈りをしている人を撮るのは勿論禁止ですが、装飾や絵を撮影することは禁止されていませんでした。



オーバーアマガウは受難劇が有名な、非常に敬虔な町です。受難劇とは十字架にか

かるイエスの受難を描く中世から伝わる劇の事で、この町では今でも毎年行われているそうです。なんと、中世に広まったペストという病気がこの受難劇の起源となります。ペストとは皮膚が黒く変化し、生存率が低いため黒死病、とよばれ恐れられていた感染症の一種です。そんなペストにおびえる町の人々は神にこの病を止めていただければあなたのことを永遠に称える、と誓います。するとペストは隣町でびたりと止まり、それ以来感謝の気持ちとしてこの劇は続けられているそうです。劇をするのは町の住人、テレビなどの報道は決して入ることのできないという、俗世と切り離されています。

これは信じれば救われる、という考えよりも信じない者、つまり他宗教者は救われることはないという事を強く表しているのではないかと感じました。当時わからないことは悪魔のせいとして考えられ、医療の未発達による不明さにより、特に対立していたユダヤ教は水浴によるペストの感染者が少なかったことから特に自らの宗教の優位性と信憑性を高めたのではないかと思います。

私たちはこの町でヴィース教会に訪れました。この教会は世界遺産にも登録されており、内装は美しいロココ様式です。ロココ様式の特徴はバロック絵画と彫刻の融合や太陽光を取れるための大きな窓です。ステンドグラスを使用しておらず、アウクスブルク大聖堂に比べても明るい雰囲気を感じました。日の光が教会内部にやわらかい光を落とし、とても神秘的な様子です。絵画と彫刻は全て精巧で、聖書の一部を表しています。天井には‘裁きの門’が大きく

描かれています。

教会にこのような絵が描かれているのは偉大な預言者や天使、キリストを称えるという事だけでなく、訪れる信者たちがより聖書に親しみを持つことにもつながっていると思います。このような可視化はプロテスタントやユダヤ教では禁止されています。しかしカトリック教会を訪れた中で、このような芸術作品は信者に大きな感動をもたらし、親しみをもつことに大きく関係しているのではないかと思います。



またこの教会もミサ中でなければ撮影はゆるされていました。私自身、教会は神聖な場所なのでカメラも禁止されているのではないかと感じていましたが、これは欧米宗教に対する現状の理解の不足と偏見からきているのではないかと思います。私自身、全ての信者が敬虔なイメージを持って

いることに気が付きました。しかしこの教会も、日本の寺院も観光客は絶えず、周囲の店は小物を売っています。教会や寺院は俗世と完全に離れることができない代わりに媒体となって様々なことを発信しているように思われます。またホストファミリーの中にも毎週教会にはいかない、という人もいたため、日本同様、宗教形態や社会における位置づけなどはかなり変わってきているのではないのでしょうか。

その後訪れたノイシュヴァンシュタイン城でも天使の描かれた大きな絵画が飾られているのを見ることができました。壁にそれらを飾ることで自らを守るすべとしていたと考えることができます。このように生活の中に宗教は深く根付いていることが伺われます。また壁にはルートヴィヒ2世は自らの好んだ物語を書かせています。日本でも屏風絵が盛んになるなど、芸術的面から見ても共通点があります。

上記のように、芸術は宗教と深くかかわりがあることがわかります。絵画や彫刻物、その他の美術品においても教会が一つの展示場となることで人々は芸術に対して日々の生活から比較影響を受け、興味を持つことができます。また教会に行けば良質の芸術品をみる事ができるので、若い芸術家などでも比較的簡単に訪れることができるなど、このように教会が芸術の仲介役となることでさらに発展していく事ができたのでしょう

日本でもお寺は芸術の舞台となりました。最初にも述べたように大覚寺の本堂の横には能の舞台が建てられえていますし、お寺

の天井には曼荼羅が描かれていたりします。私たちが何となく眺めていた屏風や仏像などは立派な芸術品であり、日本文化を今に伝えるものです。このように芸術と宗教は深く関係しており、宗教の信仰の場が芸術の発展の基盤となっているということがわかります。

ダッハウ収容所を訪れた時、端にユダヤ教、仏教、そして基督教の教会があることを知りました。日本ではモニュメントや記念碑を建てるイメージがあり、あまり宗教的関心を国民全体が持っていないような気がします。しかしそうではなく、きちんと自分の宗派に合った教会でお祈りをささげてもらうというのはその人の意志の尊重であり、大切にすべきものだとおもいました。日本でもそのようは意識をもつ必要があるのではないかと考えます。

このように文化を知り、互いを理解するために相手の宗教を理解することは非常に大切だと思います。しかし宗教は知る手段の一つにすぎません。それらを学ぶことは自分の知識を広め、自分の慣習と照らし合わせることで相手の良いところと、そして自分のいいところの両方を知ることができます。今回の研究調査において、私の知らなかった世界を広げることができたとともに、自分の宗教、そして生まれ育った町について詳しく知ることができ、大変有意義でした。今回得た知識だけでなく、さらに勉強を重ねてより見聞を深めていきたいです。